

論文要旨

【目的】

女子学生に対し「子宮頸がん・検診教育プログラム～Let's try 子宮頸がん検診」を実施・評価すること、および、プログラムの、検診に対する意向の変化や受診行動への影響を検討すること

【研究方法】

本研究は女子学生を対象にした子宮頸がん・検診教育プログラムを作成、実施し、プログラムの評価を行う評価研究である。研究の対象は首都圏の全日制大学・短期大学・専門学校に通う女性で、年齢は今年度 20 歳になる者から 26 歳未満、子宮頸がん検診を一度も受けたことがない者とした。教育プログラムはヘルスビリーフモデルを基盤に、子宮頸がんに関する知識、ヘルスビリーフモデルの 5 つの健康信念を高める内容で構成した。プログラムの評価は、プログラム前後に無記名式質問紙を行い、プログラム前後の知識、健康信念尺度、自己効力感尺度の得点の変化を分析した。子宮頸がん検診の受診の意向の変化は、プログラム前、プログラム後、プログラム 2 か月後の変化を分析した。

【結果】

本プログラムは 1 回の参加で完結するプログラムを計 6 回提供し、事前にエントリーのあった 28 名中 27 名が参加した。参加者は 6 グループに分かれて受講し、1 回あたりのグループの人数は平均 5 名であった。プログラム前後での知識得点の平均点の差は統計学的に有意差を認め、プログラム後に知識得点の増加がみられた ($t(26) = -10.01, p < 0.05$)。プログラム前後での健康信念尺度の各下位尺度の平均点の差は、「利益」得点は有意にプログラム後の得点は増加した ($t(25) = -5.25, p < 0.001$)。「障害」得点は有意にプログラム後の得点は減少した ($t(26) = 9.05, p < 0.001$)。「重大性」得点は有意にプログラム後の得点が減少した ($t(26) = 5.14, p < 0.001$)。「罹患性」得点には変化は見られなかった。プログラム前後の自己効力感尺度得点は有意にプログラム後に得点が増加していた ($t(26) = -3.81, p = 0.001$)。プログラム前、プログラム後、プログラム 2 か月後の 3 時点すべてにおいて回答があった 21 名の子宮頸がん検診への受診の意向を示す変容ステージは、統計学的に有意な変化は認めなかった。プログラム後に 2 名が子宮頸がん検診を受診した。

【結論】

本研究プログラムによって、子宮頸がんの「知識」を習得することができ、健康信念は「利益」「自己効力感」の認知は高まり、「障害」「重大性」の認知はプログラム後に低下した。プログラムの参加者が、子宮頸がんを自分事と捉えるために今後のプログラムでは「罹患性」と「重大性」を高める内容を強化する必要がある。また、子宮頸がん検診受診の意向の変化、受診行動へとつなげるために、教育プログラムと効果を補強するための他の方法の組み合わせが必要であることが示唆された。